小・中学生と考える「北斗市のまちづくり」

石別地区広域総合防災訓練から

広報ほくと連載企画「小・中学生と考える北斗市のまちづくり」では、次世代を担う子どもたちが『わたしたちにもできること』という視点で話し合う現場を取材し、取材した内容を掲載しながら、みなさんと一緒に北斗市のまちづくりを考えていきたいと思います。

今回は、25年間続く石別地区広域総合防災訓練にスポットを当てます。

考え続けることの大切さ

9月1日、石別地区では、児童生徒と地域住民が参加する石別地区広域総合防災訓練を石別小、石別中学校の体育館を会場にして実施。

9月7日には、石別小学校で防災訓練の振り返りを行いました。

振り返りでは、段ボールベットの組立を体験した子どもたちから、「段ボールベットは少し硬いから、おじいちゃん、おばあちゃんが寝たら体が痛くなるかも。キャンプなどで使うフロアマットも用意したらどうかな」「空気で膨らませる簡易マットがあればいいね」など、意見が次から次へと出てきます。

これで仕方がないと諦めるのではなく、もっといいものはないかと、常に子どもたちは考え続けています。

僕は、指示待ち人間にはならない

ある児童が話してくれました。

「東日本大震災では、釜石の中学生が指示を待つことなく、自ら行動を起こした出来事を市役所の人から聞いた。自分から行動するとみんなも動くので、自分から動くことが大事だとわかりました」。

他の児童は、「子どもが動くと大人も動いてくれる。子どもが言うと大人たちは、しょうが無いなぁと思って動いてくれると思う。大雨が降って大丈夫だろうって油断していたら、避難ができなくなったり、どんどん被害が広がってしまうので、何が必要かを考えながら行動できる人になりたい」と話しました。

みなさんはこの言葉を聞いて、どう感じましたか？

なぜ25年間も続いているのか

石別地区の防災訓練は、1998年（平成10年）9月1日に始まりました。その背景には、南西沖地震による津波被害が甚大であったことから、海に近い石別地区も同様のリスクを回避する必要があり、それがきっかけで始まりました。

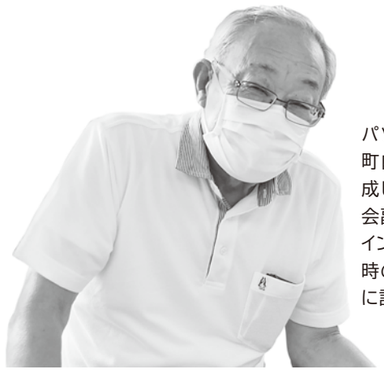
石別町内会副会長の菅原力さんは、「石別地区の住民は、自分の住んでいる地域が津波や土砂災害の警戒区域などに入っていることを自覚し、その重要性を理解しています。だから、自分で考え行動しなければならないと思っている。その積み重ねで防災訓練を継続したことにより、昨年の当別川氾濫時には、住民それぞれが、効果的な対策をし、町内会で協力して炊き出しの対応などもできました」と話します。

「まずは、自宅から避難所までどのくらい時間がかかるかを知ることが大切。所要時間を知ることで、時間を逆算して適切な行動をとることができます。

防災に正解は、ありません。

だからこそ繰り返し訓練を行うことで新たな問題を見つけることができるし、非常事態でも冷静に対応ができる。飽きるほどの繰り返しが必要だと思っています」と話してくれました。

【石別町内会】
会長　石岡正徳さん　203世帯



パソコンを使いこなし町内会の資料など作成している、石別町内会副会長の菅原さん。インタビューでは、設立時の資料を交え、丁寧に説明してくれました。

地域とともに成長を

地域防災力を向上させるためには、自助と共助が欠かせません。子どもたちに「自分の命は自分で守る」ということだけでなく、「大切な家族や地域の人たちの命も守る」という気持ちを育むことが重要です。

今回の石別地区広域総合防災訓練では、子どもたちと地域の住民が、災害発生を「わがごと」として捉え、話し合うことによって、地域のために自分たちは何ができるのかを考えるいい機会となり、その中で、強い意志を持って行動し、思いやりを持って困っている人に接する大切さを理解して頂いたと思います。

この経験を、防災だけにとどめることなく、いろいろな場面で発揮させることにより、将来を担う子どもたちが地域を愛し、そしてもっと地域をよくしていこうと思う好循環を生み出すのだろうと感じました。子どもたちが地域とともに成長していくことを期待しています。

（総務課　危機対策主幹　石川　貴茂）

市では令和5年度から、津波被害の対策など市の地域防災能力を向上させる目的で、危機対策主幹職の職を設置し、防災対策の強化を図っています。